

弥生時代の井戸

大野城市教育委員会



本堂遺跡の井戸



井戸の断面

井戸とムラ 現在、福岡県内で見つかっている最も古い井戸は縄文時代後期（4000～3000年前）のもので、縄文時代の井戸は数えるほどしか見つかっていないので、当時の人々はほとんど井戸を掘らなかったようです。しかし弥生時代になると井戸を掘るムラがだんだん見られるようになり、特に中期後半（約2000年前）以降は増え、県内では現在、50遺跡で約700基が見つかっています。中には福岡市博多区にある比恵・那珂遺跡のように、約300年にわたって約400基の井戸を掘るムラもありますが、ムラによっては井戸を持たない所もあります。これは井戸が必要かそうでないか、ムラの作られた場所が水が湧きやすい土地かそうでないか、どれくらいの数の人々が、どれくらい長く住んだかなどの、いろいろな理由があるためと考えられています。大野城市では上大利の本堂遺跡や仲畑の仲島遺跡で見つかっており、今回は本堂遺跡の井戸を紹介します。

本堂遺跡の井戸 井戸が5基見つかりました。出土した土器を調べてみると、全てが同時に使われていたわけではなく、弥生時代中期末（約1950年前）から数十年の間にそれぞれが使われていたことが分かりました。いずれも地面を掘っただけの作りで、調査の時は、今でも見えそうなくらい、水がこんこんと湧いていました。平面形は円形に近く、断面形は底にむかって少しすぼまりますが、ほぼ垂直に掘られているものが多く見られます。調査時の大きさは直径1.0～1.5m、深さは浅いもので1.6m、深いもので2.4mでした。発掘調査の前、ここは現代の人々によって水田や住宅地として利用されていました。そのため弥生時代よりも地面が削られているので、これらの井戸が使われていた時はもっと深かったことでしょう。またそれぞれの家に専用の井戸があったわけではありま

せん。ですからムラに住む人たちみんなと一緒に使っていたのではないのでしょうか。

井戸を掘る 井戸は身長より深いものもあり、底へ掘り進むにつれて少しずつ狭くなっています。発掘調査の時は、現代の私たちも大変苦戦しました。一体、弥生時代の人々はどんな道具を使って掘ったのでしょうか。遺跡から時々、金属製の刃先（木製スコップなどの先に取り付けて使うもの）が出土するので、これらを取り付けて使ったのかもしれませんが。比恵・那珂遺跡群では、なんと！深さが5mもある井戸が見つかっています。どこまで掘ったら水が湧くのか分からない硬い地面を掘ることは、きっと弥生時代の人々にとって大変な仕事だったと考えられます。しかし井戸を必要とする人々にとっては、その難しさ・労力を上回るメリットがあったに違いありません。人々は井戸を掘ることでムラの外へ出ることなく、必要なときに必要なだけ、きれいな水を手に入れることができるようになりました。これは現代に例えると、家庭の中の水道といったところでしょうか。

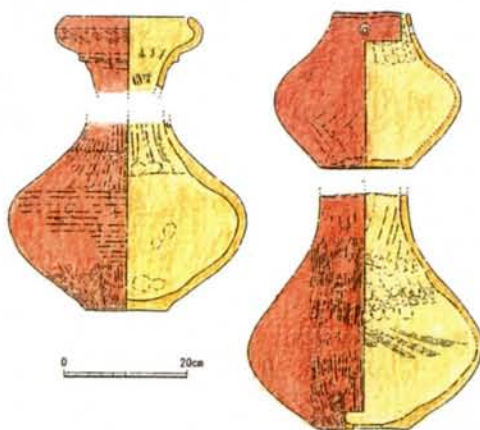
井戸のまつり 井戸のうち1基では、底面の約40cm上から完形（どこも壊れていない状態）に近い丹塗土器が出土しました。これらはとても丁寧に作られ、赤い顔料が外面に塗られており、祭祀（祖先や土地の神などをまつる儀式）に使われた特別な土器です。弥生時代の祭祀は墓や水田・井戸などで行われ、人々の生活と密着していたことが分かっています。井戸祭祀に使われた土器は、様々な種類が出土し、完形品、その中でも特に壺が多く出土する傾向があります。おそらく壺にお酒や食べ物を入れて井戸の中に沈め、神にささげたのではないのでしょうか。また祭祀にも種類があります。底面のすぐ上から祭祀土器が出土する場合は、井戸を使い始めるとき、本堂遺跡のように底よりも上の方から出土する場合は、使っているときに何かの理由で祭祀を行ったか、または自然と埋まって水が湧かなくなったときに行われた祭祀と考えられます。

現代でも井戸には水神様が住むと考えられています。また名前や方法は日本各地で違いますがいろいろなまつりがあり、井戸を使い始めるときや正月、水不足のときや井戸を何かの必要があって埋めるときなどには、神様にお供えやおはらいをします。『大野城市の文化財 第15集』によると、大野城市では井戸を埋めるときには「水神あげ」というまつりをするそうです。

以上のことから、弥生時代と現代の間には約2000年という長い時間が流れていますが、人々は生活に不可欠な水を生み出す井戸を大切に敬うという精神を、変わることなく持ち続けていることが分かります。



祭祀土器が出土した様子



祭祀に使われた土器